

一対の塔木枯を奏で合ふ

藤田湘子

晩秋から初冬へかけて吹く強い風は、音を立てて鳴ることが多い。木々の葉を落としてしまう寒々しい風であるが、一対の塔の間に吹き渡るその風の音を、ふたつの塔が奏で合っていると感じたのだ。何と抒情的な表現であることか。湘子の詩人のたましいに、今更ながらに感動。感覚的な美しき景である。

湘子は置酒歡語を好み仲間との交歡を楽しんだが、自然との付き合いでも、心身を澄ませて交感を楽しんでいたように思う。

「鯛焼と弓張月と感じ合ふ」「藁塚の二つくたびれ合
うてゐる」「水の香と木の香かよへり雪催」等掲句に通
じるような心の通わせ方を感じる句も多い。

2001年 (H13作) 第十一句集『てんてん』 鑑賞・野本京